

OAとOR

レエルウェー・システム・リサーチ 代表取締役

横山 勝義



たいていのORの講義は「ORとは何か」という定義から始まる。

ORは特別に定義しにくいゆえか、直接的・間接的、あるいは演繹的・情緒的に、さまざまな角度から、ORの本質をとらえようと試みた数々の定義が多くの人たちによって述べられているが、私の頭の中に一番強く印象づけられているのは、“ORとは、Heuristicな考え方である”という表現で、おぼろげな記憶が正しければ、大阪で横山保先生から、ご教示いただいた言葉である。

Heuristicとは、本来、学生にみずから真理を体得させる式の教育方法という哲学の言葉だと辞書にのっているが、ここでは、具体的にいえば、ゴールがあって、スタートがあって、その間をStepwiseに段階を刻むことだという。ゴールを富士山頂とし、スタートを東京とすれば、東京から富士山頂を遙かに望むことはできる。だが、いかなる手だてを経て、ゴールに到達し得るかが問題なので、まずスタートして最寄の駅にゆき、電車にのり、どこそで乗り換えて、どこまで行き、バスを利用して云々…というふうに、ステップを刻んでゴールに達するアルゴリズムを明示しなければこれを解いたとはいえない。そしてそのステップを刻むことこそがORだというのである。

このたびの臨時行政調査会で、先の本学会々長土光さんが、立派な答申を出された。ご高齢の身で、大変なご苦勞があったことと拝察し、国民の1人として感謝にたえないところである。

この答申に示されたように、今の行政の在り方を改革して“小さな政府”をつくり上げるべきで、今にして断行の時機を失すれば、国家の将来も危ぶまれるというゴールはきわめて明確であるのだが、現状をスタートとして、ゴールにいたるステ

ップが必ずしも明示されていないことから、総論賛成各論反対といったきわめて情緒的な反論が湧きおこるのは、はなはだ心外である。われわれに、完全なステップを刻む能力があるわけではないが、せっかくの答申をより具体化し少しでもゴールに近づけようと努力して、ステップを刻んで進むOR的思考を繰り返すことが必要なのではなからうか。とにかく、総論賛成各論反対などは、ORワーカーが、絶対に口にしてはならない禁句である。

標題へもどって、最近のOAの流行は、コンピュータに裏づけられたもので、コンピュータをさしおいて考えることはできない。

ところで、コンピュータ以前には、機械はそれらがつくられる前に、まず仕様書が検討され、決定され、これを必要にして十分な条件として製作された。D51といえば、長大貨物列車を牽引する仕様書にもとづいてつくられた機関車のことで、旅客にでも貨物にでも山線にでも使えるといった万能機関車を先につくって、さてどう使おうかと考える方法などは考えてもみなかったのである。

コンピュータは、仕様を決めずに、十分条件だけでつくられた、はじめての機械といえる。いわば、なんでもできる万能の機械として生まれてきたのである。

普通の機械であれば、仕様書と取扱説明書によって、使い方がくわしく述べられているが、コンピュータの仕様書には、メモリーの大きさとか、使用する言語が示されているだけで、買って来ただけでは、動かすこともままならないし、用途が

定まらなければ万能は無能に等しい。

企業サイドから見ると、TQCの導入によって生産現場の管理については、無駄を排除し、生産性をあげることに成功した。この次は管理部門の合理化だ。それにはコンピュータを使うべしという意見はわかるが、どういうステップで導入してどういうふうにルーティンの仕事に定着させてゆくか…。そこでORに登場してほしいということになるのであろう。

ワードプロセッサの人気は、今やマイコンの中でも一層爆発的である。

ワープロが普及すれば、漢字制限なども解消して、「仮名交りの漢字」の読みやすさが、復活されるだろうと内心喜んでいたら、数日前の新聞には「印刷業の仕事が減って、企業の死命を制することになりかねない」という記事が掲載された。まさにOAの実施のむずかしさを示す具体例の1つである。

ワープロの人気は、単能機に近く、われわれにとってもその性能をある程度判断でき、購入後の仕事の適不適の判断もできる点に原因する。

このような見方からすると、オフィスコンピュータと銘打って小規模企業用売上げの整理や在庫の整理を狙ったシステムが、はやりかけていたのに、あとからきたマイコンブームに押し流されてしまったかに見えるのは、残念なことである。

実際に、月次試算表の作成と在庫または売掛けの状態把握とは、企業にとって最も重大な管理指標であり、前者は集計に手間どって遅れ遅れになりがちであること、後者は、商品について1つ1つ調べ上げなければ、正しい数字がつかめない点に、管理者側の悩みがある。OAの課題として、当然とりあげられ、単能コンピュータが出現しても不思議でないOAの対象であるはずである。

ひと頃、学問の分野が細分化し、おのおのが専門的に突込んだ研究を進めた結果、お互いの間に

深いギャップが生じたので、これを埋める努力をしようというて、学際的な活動が提唱された。

考えてみると、企業の中も、大会社は大会社なりに、中小企業はそれなりに縦割りになっていて、部門間のギャップは予想外に大きい。OAの目標の1つがこのへんにもありそうである。

この問題は、会社全体を1つのシステムとしてとらえることが前提となり、財務上のデータにかぎらず、技術データを交えた大変に複雑なものとなろう。

さらにもう1つ、コンピュータの発達で、数値計算の方法を180°代えてしまったことに思いをいたすと、われわれの学んだ工学のそれぞれの分野も、システムの新しい仕組みで書き替えられてしかるべきではないだろうか。

たとえば、われわれが机上に置いている便覧などは、旧来の記述的な内容を一新してProgramableなものに書き替えられる時が、早晚くるものと予想される。

ともあれ、マイコンが、予算的に少々無理をすればわれわれの手のとどくほどの値段になってくれたことは、大変よろこばしいことである。

冒頭に述べた Heuristic という言葉には、仏教でいう“悟り”に似て、みずからの努力を重ねて、真理を発見するという意味がある。ORもしょせんは、DIYに類するもので、毎日たとえ1歩でも半歩でも、ステップを刻む努力を継続することが肝要であると確信する。

私も、小さな自分の会社をもち、マイコンを机上に置いて、キイをたたきながら、自分自身のORが、口頭禅に終らぬよう精進しているつもりである。

以上述べたところは、その間の結果を私なりにまとめたもので、個人的な偏りや誤りのある点、論旨がトップの視点に、ふさわしからざるものとなり下った点については、平にご容赦願いたい。